

「清くなれ」

2014年07月15日

マルコによる福音書1章40節～45節。「さて、重い皮膚病を患っている人が、イエスのところに来てひざまずいて願い、『御心ならば、わたしを清くすることがおできになります』と言った。イエスが深く憐れんで、手を差し伸べてその人に触れ、『よろしい。清くなれ』と言われると、たちまちらい病は去り、その人は清くなった。イエスはすぐにその人を立ち去らせようとし、厳しく注意して、言われた。『だれにも、何も話さないように気をつけなさい。ただ、行って祭司に体を見せ、モーセが定めたものを清めのために献げて、人々に証明しなさい。』しかし、彼はそこを立ち去ると、大いにこの出来事を人々に告げ、言い広め始めた。それで、イエスはもはや公然と町に入ることができず、町の外の人のいない所におられた。それでも、人々は四方からイエスのところに集まって来た。」

「重い皮膚病」はギリシャ語で「レプラ」となっている。1997年の改定までは「らい病」と訳されていた。彼がハンセン病であるか重症の皮膚病であるかは分からないが、当時、この種の病に侵されると、律法によって共同体から排除され、人が近づくと「私は汚れた者です」と叫ぶように定められていた。もちろん、感染が恐れられたからである。ところが、彼は主イエスのところに来て、ひざまずき「御心ならば」といやしを懇願した。律法違反である。律法を犯して、このような行動に走った。どんなに深い苦悩と孤独の中にいたかが分かる。主イエスは「深く憐れんで、手を差し伸べてその人に触れ」た。「憐れみ」という言葉は上から下へ同情するような響きがあるが、原意は「はらわたがちぎれる」という意味である。主イエスは、彼が負っている苦悩に「はらわたがちぎれる」ほど、同じ立場に立たれた。そして、手を差し伸べて彼の体に触れた。

私は、この聖句を読むたびに、友人との苦い出来事を思い出す。高校生時代、友人が髪の毛、眉毛も抜け落ちる病にかかり、いつも帽子をかぶっていた。休み時間、後ろの席にいた彼は、私の頭に帽子をポンと乗せた。私はとっさに払いのけ、床に落とす。感染することを恐れたからだ。振り向いてみると、彼は自分の帽子をかぶっていて、私の頭に乗せたのは私の帽子だった。私の仕草に、彼はどれほど傷ついたらろう。2000年に、ブラジルに行った時、堀江節郎神父が、ある村を案内してくれた。数名の元ハンセン病患者が車椅子で散歩をしていた。外出できない元ハンセン病患者の施設に行った。神父は一人ひとりと抱き（ハグ）合って挨拶を交わした。私も神父の真似をした。一人の人が足先に帽子をひっかけ、その足を振り上げ自分の頭にポンと乗せる仕草で、私たちを笑わせてくれた。笑ったけれども、私の頭に帽子を乗せた友人のことが思い出され、胸が詰まった。

律法を犯して、主イエスにいやしを懇願した彼は罵倒され石を投げつけられ、体に触れてもらうことなどあり得なかった。ところが、主イエスは手を差し伸べ触れてくれた。手のぬくもりは、どんなに嬉しかったらう。主イエスは「よろしい。清くなれ」と宣言された。その宣言は、病がいやされ清められる事実となった。そして、祭司に体を見せ、律法通りの献げ物をして、共同体に復帰しなさいと言われた。旧約聖書のレビ記に、重い皮膚病がいやされた時、復帰のための手続きが律法で細かく規定されている。皮膚病はハンセン病だけではなくたということだ。「憐れみ」を受け、共に生かされることが福音である。主イエスが示してくださった福音に「アーメン」と承認することが信仰である。